

「哲学教室同窓会記念講演」要旨

愛知教育大学社会科教育講座(哲学専修) 吉田健太郎

哲学の価値とは何か。このことを、哲学の原点に立ち戻って考え直してみたい。以下、前半は「価値」について、より一般的に述べてみる。後半は哲学の「原点」としてのソクラテスの「無知の知」について述べてみたい。

まず、「価値」についてだが、私は価値を、とりわけ哲学の「価値」が問題になる場合には、「享受すること/できること」と捉えたい。たとえば音楽の価値であれば、われわれが実際に演奏なり鑑賞することを通じて、それを楽しむことができるという点において測られるべきものであろう。バッハやベートーベンといった過去の偉大な芸術家が残した作品それ自体に「価値」があるわけではない。なぜ、それらは価値あるものとして認められ続けているのか。いうまでもなく、それらがわれわれに鑑賞の「喜び」「楽しさ」を与えてくれるからである。われわれが「楽しみ」を享受する限りにおいてである。

このようにいうと、次のように反論・批判する人がいるかもしれない。「価値を享受可能性のような主観的基準によって測定するのでは不十分だ。個人レベルでの能力・資質・性格・感受性等を超えて、普遍的に認められる「価値」があるべきだし、実際にあるだろう。たとえば基本的人権などはそうした普遍的価値ではないのか。障害者は知的活動・芸術活動を享受することができないからといって、障害者自身の存在価値がなくなるわけではない。享受可能性という視点から価値を測定する価値観は、それゆえ、障害者差別などに繋がるのではないか。」

この種の反論に対して私は次のように答えよう。障害者が芸術活動・知的活動を享受できないという判断は、いわゆる「正常な」人間からの判断に過ぎないのではないのか。「正常な」大人はすでに出来上がった社会通念を判断基準として障害者の行為を価値判定しているわけだが、その判断基準自体が、逆に障害者を差別することに手を貸しているとはいえないか。一步譲って、いわゆる障害者たちは知的活動を享受する能力に欠けているとしよう。しかしだからといって、「生きること」それ自体を享受していないというのであろうか。ここでもまた、享受可能性がいわゆる理性的人間の習得すべき特性でもって測定されてしまうのであれば、同じことの繰り返しとなってしまう。反論者が価値の普遍性にこだわるというのであれば、私は「享受可能性」をより広い意味で解していると理解してもらえない。

小泉義之は『デカルト＝哲学のすすめ』(講談社現代新書)で、価値を享受可能性という視点から捉え、サルトルの問いを逆手にとって、文学の価値は「飢えを満たすことにあるのではなく<精神の糧>となること」だと述べている。いうまでもなく、文学は、そして哲学も、飢えを満たさない。飢えている者の前で何よりも価値あるものは「パンと水」に決

まっている。このことと、文学や哲学の価値とを混同してはならない。したがって、「哲学」の、社会変革を含意する「社会貢献」を声高に言い立てることは、いかにも安易な発想であるし哲学そのものの自殺行為だろう。つまり、一般に哲学の価値はそれがわれわれの「精神の糧」になるかどうか、いいかえるならわれわれがそれを「享受し得るか否か」に存するという点、この点を忘れないようにしよう。

翻ってみればしかし、このことは「幸福」についても、あるいは「善く生きること」についても同様にいえることだろう。民主主義という社会制度それ自体が価値あるのではなく、それがわれわれに精神の充足感・満足感を喚起するからこそ、民主主義なり人権概念が価値あるものと認定されるのだ。当たり前といえば当たり前のことだが、この点を見逃すと手段と目的とを逆転させてしまう結果となる。福祉社会それ自体が、あるいは環境保護それ自体が、究極目標となってしまうような滑稽な社会を想像してみればよい。

「道徳」や「倫理」についても同様である。世の道徳至上主義者たちは、規範に従うことそれ自体に至上の価値を見出しているように映る。極端な者になると、規範に従うという意味での「倫理的な生活」そのものが、その人物の「価値」を決定するのだと解しているようにさえ見える。しかし原点に立ち返って考えてみるならば、そもそも倫理/道徳というのは「楽しみ」や「喜び」を享受する力能のことを言うのではなかったか。生きること/行動することに、まさに「喜び」「楽しみ」を感じることでできる力、それらを十分に味わうことでできる力、そうした意味での享受する力能のことを古来よりわれわれは「倫理」と呼んできたのであった。学力が既成の教科内容の反復可能性というよりは、むしろ勝れて学ぶ意欲・学びを享受する力のことだとすれば、同様のことが倫理/道徳についてもいえるだろう。自らの生に対して、それを肯定し享受している者、まさにそのような者が「善く生きる」という意味での倫理的な生を営んでいる者なのだろう。社会制度や社会規範は、あくまで、われわれが「善く生きる」ための条件整備なのだ。(もちろん、こういつたからといって、社会制度/社会規範/社会正義の意義を私は過小評価しているわけではない。むしろ逆に、私は「正しく生きる」という意味での社会正義の習得をある意味で優先させるべきだと考えているし、学校教育で実施される公民科は、まさに社会正義・公共精神を養う場だと考えている。要は、「社会の問題」といわゆる「心の問題」とを混同してはならないということだ。)

教育界において「生きる力」というキャッチフレーズが一頃流行っていたが、この言葉にしても、「生きることを享受できる力」のことと解すべきではないか。そのような力を備えた者は、道徳家による「お説教」によらずとも、結果的には社会規範に沿う生き方を選択することであろう。自らの人生を肯定的に享受し味わうことでできる者は、他者に対して寛容であるだろうし他者との連帯・協力を惜しまないであろう。アランがいみじくも言っていたように、「幸福であることは権利ではなく義務である」のだ。

ところで、このような意味で生きること/知ることを享受したのがソクラテスその人であ

る。ソクラテスといえば「無知の知」で有名である。教科書的には次のような解釈が一般的だろう。「自らの無知を自覚している者こそが、自らの知識を鼻にかけている者よりも、実のところ知恵ある者といえるのだ」。この解釈は誤りとはいえないものの、しかし私は、ソクラテスの言わんとするところに達していない解釈だと思う。問題は、ここでいわれている「無知」をどのように解釈するかである。今のところまだ勉強不足で不確実にしか知らないのだが、努力して勉強すれば確実な知識に到達する可能性があるという意味での「無知」なのか。「無知の知」を、人間みな努力が重要というような教訓的処世訓として捉えるならば、それもあながち間違いだとは言いきれない。だが、ソクラテス自身の「神のみが真に知恵ある者であって、人間の知恵などは、まったく価値のないものだ」という叙述に着目するならば、また別の解釈が可能である。

なぜソクラテスは「人間の知恵などはまったく価値がない」というのだろうか。全知全能の神に対して、人間の知恵の有限性をいっているだけに過ぎないのだろうか。そうだとすると、この有限性の意味するところを更に考えてみる必要があるだろう。私は、以下の三点を解釈のポイントとしてあげておきたい。

1. 有限な人間は、二分法的思考法から脱け出すことができないということ。

人間的分別は、ものごとをまさに区分/分類する。もの「分かり」のよさとは、いかに上手く「分ける」ことができるかということにある。たとえば真/偽・善/悪・正義/不正・正常/異常・生/死・健康/病気…。ものごとを適切に分類することができるということが理性的人間のメルクマールである。しかし、こうした二分法自体が、事実を誤って捉えている可能性はないのだろうか。人間的分別によって引かれた境界線によって、逆にわれわれ自身が欺かれているという可能性はないのだろうか。

2. 「生」「世界(宇宙)」「自己」のリアリティーは、人間による対象＝客観化を不断に逃れる「何か」であるということ。

人間による客観的思考の網の目によって測りえない「何か」、しかしわれわれに何らかのしかたで与えられている(思考されている/触れられている)「何か」、そのようなものに対する知のあり方は、通常客観的認識の尺度とは別の尺度でしか測ることができないのではない。いうまでもないことだろうが、ここで言及されている「何か」は、けっして超越的・神秘的な「何か」と混同されてはならない。というのも、いま問題となっているのは、まさにわれわれに最も身近な「生」「自己」といった類のものだからである。対象＝客観的認識は、認識主体と認識客体との間に「距離」を必要としている。否むしろ、こういったほうがいいだろう。両者の距離の測定が対象＝客観的認識といわれるものの本質なのである。ところが、「生」「自己」などは、まさに測定されるべき「距離」をもたない。測定するものと測定されるものの同一性といった特異な在りかた、それが「生」「自己」のリアリティーを構成している。そうだとすれば、われわれは単に、探求に必要な測定器具をまだ所有しておらず開発中の段階にあるので、不確実な知のレベルに止まっているのだというのではなく、むしろ、そもそも原理的にそのような知がわれわれに開かれているのか否か

を疑ってみる必要があるのではないだろうか。

3. 人間的視点から「自然（ピュシス）」の視点への転換ということ。

おそらく、ソクラテスの提示した重要な、しかし見落とされがちな論点は、制度に従った世間知に代表される人間的視点（＝ノモス）から、ロゴスに従う「自然（＝ピュシス）」の視点への方向転換ということではなかつただろうか。ギリシアの哲学者たちが用いるロゴスなる語は、「人間的」認識の道具といった狭い意味で理解されるべきではなく、人間存在もそのうちに包含される「自然（＝ピュシス）」の摂理を意味するロゴスとして理解されるべきなのだろう。そうだとすれば、ソクラテスを人間中心主義的な系譜のうちに、しかもその系譜の祖先として位置付けるのは、そもそも誤りだということになる。哲学を神話的思考からの解放として単純に理解してしまう教科書的発想にしても同罪である。神話はすでに自然の擬人化である。人間的原理による自然の説明である。哲学が脱神話といわれるとすれば、それは哲学が自然本性/ロゴスに従った探求であるからこそである。